

事例 I-1-1

初年次教育 —「伸ばす」ではなく「伸びる」を目指す—

～聖学院大学～

☆本事例の中心人物

学長 阿久戸 光晴氏、

欧米G P推進室 佐藤 啓介氏

事例内容

【概要】

聖学院大学では、学生自身が主体的に学習していくために、面倒見のよい、きめ細やかな教育を徹底して行っている。以下に紹介する取組内容は、人文学部欧米文化学科での初年次教育の事例である。なお、欧米文化学科の「生きるための人文学へ向けた学びの基礎力～大学での学びは読む力・考える力・調べる力・書く力の訓練から～」は、文部科学省の平成21年度「大学教育・学生支援推進事業 大学教育推進プログラム」に採択された。

【背景】

欧米文化学科は、「グローバリゼーションが進む現代において、欧米の文化価値を正しく理解することにより、国際社会の一員としての責任を果たす人材」を養成することを目標としている。しかし、こうした人文学を修得するには、「考える力」「調べる力」「書く力」を十分に身につけることが最低限必要である。そして、この三つの基礎力を身につけるには、最初に「読む力」をきたえなければならならず、以上の四つの力の指導体制の確立と実行が急務となった。

従来、初年次教育は入門ゼミとして存在していたものの、明確な具体的対策は整っていなかった。そこで、欧米文化学科で体系化を図った。

【取組内容】

教育理念、授業内容、カリキュラムという全体の枠組みからの検討ではない、学生の個人別の指導という視点からの検討をした結果、e-ポートフォリオを導入することにした。e-ポートフォリオは、教員、学生の双方が閲

覧・書き込みができるもので、教員が学生の課題達成度を細かく確認・評価し、また、学生が自分自身の成長を確認し、新しい課題を自ら発見できるようになっている。

「読む力」の指導としては、まず、入学後の春学期に基礎ゼミにおいて、読解のために必要なアンダーラインの引き方、要約の仕方など、基礎的な内容について教員が個別に添削、指導をする。教室外学習では、リーディング・ラボを設置し、読み方の個別指導を行うとともに、習慣化を目指す。読む文章は物語ではなく、論理的思考力を養う評論・論説を主とし、また統計資料やメディア資料など、近年そのリテラシー教育が重視されているものを対象に含めることで、批判的読解の姿勢を広く学んでいく。そして、段階を経て、徹底した少人数教育の下、「考える力」「調べる力」「書く力」の育成も目指す。これらの指導はオリジナルテキストを用い、基礎能力の訓練を行う。しかし、このような基礎能力の育成は、授業時間内だけで完結するものではなく、また、教員の一方的な指導のみで達成するものでもない。そこで、e-ポートフォリオを導入することで、学生自身が授業で取り組んだ課題や作成した資料をアーカイブ化し、自分自身の成長を確認することができるようになり、能動的な学習の支援となつた。そして、これらの指導により身についた学びの基礎力を基に、「生きるための人文学」の専門教育へとスムーズに移行できる。

【結果】

聖学院大学は、AOなどの推薦入試の入学者数の割合が一般入試の入学者数よりも高く、多様な学生が入学してくる入り口の広い大学であるが、出口を見ると、卒業者の就職率は決して低いわけではない。

また、学ぶ意義を見出せずに、一定のレッ

テルを貼られて自信を失ったまま入学てくる学生も少なくない。こうした学生が、聖学院大学に入学し、授業を通して、学ぶことの楽しさや考えることの大切さに気づきを得ると、みるみる表情が変わっていくという。この話から、学生を社会に通用する人間に育てることができる大学であるという自信がうかがえた。まさに、面倒見のよい大学・入って伸びる大学という教育理念が、結果となって表れている事例である。

★成功のポイント

教職員が口を揃えて言うのは、「伸ばす」ではなく、「伸びる」大学という言葉である。教員が強制的に教育するのではなく、学生の自主性を重んじ、学生自身が個人の力で、伸びていく—これが聖学院大学の目指す教育である。教員は、学生が「伸びる」手助けをしているに過ぎず、小規模大学という特徴を活かし、一人ひとりに対するきめ細やかな指導をしている。

学長をはじめとし、教員は皆、学生に対し一段上からの目線ではなく、同じ目線に立つて指導をしている。学生に主眼をおいた教育であり、どのような学生であっても可能性を信じ、たとえ個性的な発言であっても決して否定をしない。こうした指導は、今まで否定され続け、劣等感を持って生きてきた学生にとって、自信につながり、自由な「ことば」を得て発言できるようになり、伸びていくのではないか。

このような教育内容は、学生だけでなく、教員側にも変化をもたらした。着任当初、上からの目線であった教員も、2~3年すると、学生の素直さに気づき、目線が変わることである。学生が教員を変えていくのである。いわゆる偏差値の高い学生にはないような、思いもよらない視点からの考え方、回答をする学生が多く、教員は教えることのおもしろさを学生から気づかされる。同じ目線に立つの指導は、大学側が教員に強制せずとも、教員と学生とが学びあうことにより生み出

され、これにより聖学院大学の特徴である、「入って伸びる教育」が作り上げられている。

★今後の課題

先に上げた文部科学省GPのほかに、ここ2年間に2件が採択された。具体的には21年度「大学教育・学生支援推進事業」に、『「人的ネットワークによるチーム就職活動」育成プログラム』が、22年度「大学生の就業力育成支援事業に、「ICTを活用できる職業人の育成」が採択された。これらの取り組みを起爆剤に、初年次から卒業に至るまでの「伸びる」教育を総合的に組み立てていく予定である。